CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

千里金蘭大学紀要　13　117－124（2016）

〈研究ノート〉

看護学生のグループでの患者指導パンフレット作成行動について自己採点および満足度からの検討

Examined from the self-scoring and satisfaction of the patient guidance pamphlet action nursing students was created in the group

平賀　元美[1]

要旨

本研究の目的は、A大学看護学部生に対して行ったグループでの糖尿病患者へのパンフレット作成体験を通して、学生の自己採点と満足度から、学生の認識するパンフレット作成に必要とする行動を明らかにし、今後の患者指導に関わる学内教育への示唆を得るものである。研究対象は成人看護対象論を受講した2年生で同意の得られた77名である。結果は、パンフレットの自己採点と満足度はかなり関連があると認められ、グループワークにおける学生の行動とパンフレットの自己採点および満足度ではやや関連が認められた。これにより、パンフレットの成果に結びつき学生の満足度につながる作成行動には①対象を理解する、②資料やデータを集める、③パンフレットの構成を整える、④パンフレットとして絵、図の作成や配置をする、⑤発表原稿を作成する、⑥発表をする、があり、学内教育ではパンフレット作成に加えて発表体験が必要と示唆された。

キーワード：看護学生，患者指導，パンフレット，満足度，グループ学習
Key words: nursing student, patient guidance, brochures, satisfaction, group learning

Ⅰ．緒言

近年の医療の高度化に伴い入院期間が短縮され、人々の質の高い医療・看護サービスの提供への期待は、益々大きくなっている。また、厚生労働省は、ポピュレーションアプローチやハイリスクアプローチにより、生活習慣病予防の取り組みを進めてきた。一方、肥満者の割合の増加や日常生活における歩数の減少が見られ、糖尿病等の生活習慣病の有病者・予備軍が増加している（勝又, 2008）。そのため、看護職者には、専門職としての高度医療への対応、生活の質を重視しつつ疾病予防から回復までを導く看護介入が求められている。そのなかでも成人期にある患者は、その特性から生活習慣が疾病の発症や重症化に影響するため、看護介入も生活行動の変容を促すようなかかわりが必要となる。臨床では、患者へのセルフケア促進に向けたパンフレットの作成と指導のあり方が検討され（梶原, 2013：井畑, 2013：瀬戸, 2007）、パンフレット指導の効果を患者の変化から確認（石生, 2015）する、指導する看護師の認識の変化を確認（上羽, 2015：松島, 2004）するなどパンフレットを活用した指導や研究的取り組みがなされている。

「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会」では看護実践能力の養成における課題として、看護師等には主体的に考えて行動することができ、保健、医療、福祉等のあらゆる場において看護ケアを提供できる能力が求められている（文部科学省, 2011）。そのため、臨地実習をはじめとするさまざまな学習体験を通して看護を学ぶことが期待されているが、実際には患者の同意が得にくく、見学や援助の機会があってもその場に学生が身を置くことが出来ない状況もある（平賀, 2013）。臨地実習で患者指導を行う場合は、学生には、教員や指導者の指導のもとで、患者が自らの意思を持って生活行動を変えていけるよう必要な情報提供や治療や療養生活を継続するための方法を示すことが求められ、そのための学内での教育が重要となる。

学生の患者指導については、学内での学習方法

1　Motomi HIRAGA　千里金蘭大学　看護学部
受理日：2016年９月10日

としてrole-play法（小濱, 2011）やシミュレーション教育を活用（森岡, 2016）したものあるが、本研究では、研究に関わる授業で紙上事例（糖尿病、高血圧のあるA氏）へのグループ学習による生活指導を行うためのパンフレット作成（以下パンフレット作成）と、学びの共有として発表を行った。パンフレットをグループで作成することの学習効果として、主体的に調べることにより学習・実践への意欲がわき（逸見, 2006）、グループワークにおいて満足感、学習意欲が得られるグループは主体的な学習が出来る（村川, 2012）といわれている。

そこで、本研究では、パンフレット作成のグループ学習が、パンフレット作成の方法を身につける学生にとって意味あるものとなったかについて、自己採点と満足度から仮説を立てて確認を行った。これにより、学生が認識する患者指導に必要なパンフレット作成行動と学内での教育への示唆を得たので報告する。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

仮説検証型研究

２．研究対象

A大学看護学部看護学科２年生で成人看護対象論を受講中の87名中、研究同意の得られた77名（回収率88.5％、有効回答率100％）を対象とする。

３．データ収集期間及び授業内容

１）データ収集は2015年６月－７月の成人看護対象論授業時間内にパンフレット作成及び発表を行い、授業後にアンケート調査を行った。2016年２月に改めて研究説明を行い、同意書の回収（留置法）を行った。

２）パンフレット作成は１グループ７名前後の学生に対して、各グループに糖尿病で高血圧である事例A氏における、減塩指導、１日1500キロカロリーの食事の工夫（以下カロリーの工夫）、外食時の工夫、インシュリン注射の指導（以下注射指導）を割り当て（表１）、１つのテーマのみのパンフレット（Ａ３見開き１枚）作成を２コマ（180分）の授業を使って行い、１コマ（90分）で発表を行った。

４．概念枠組み

パンフレット作成と発表のプロセスにおいて、研究者自身の行動分析の結果からパンフレット作成に必要な行動は①患者を理解する、②資料やデータを集める、③パンフレットの構成を考える（構成、データや資料の順番等）、④パンフレットの文章を考える（文章作成）、⑤パンフレットの絵、図を作成や配置をする（絵、図の作成や配置）、⑥パンフレットとして清書する（文字入力、記入、印刷など）、⑦発表原稿を作成する（発表原稿作成）、⑧発表をする（発表者の役割をとった）とし、３コマ（270分）の授業を通して学生が行うものとした（以下学生の行動①～⑧）。これらの行動を通しての成果１をパンフレットの完成、成果２を発表体験とし

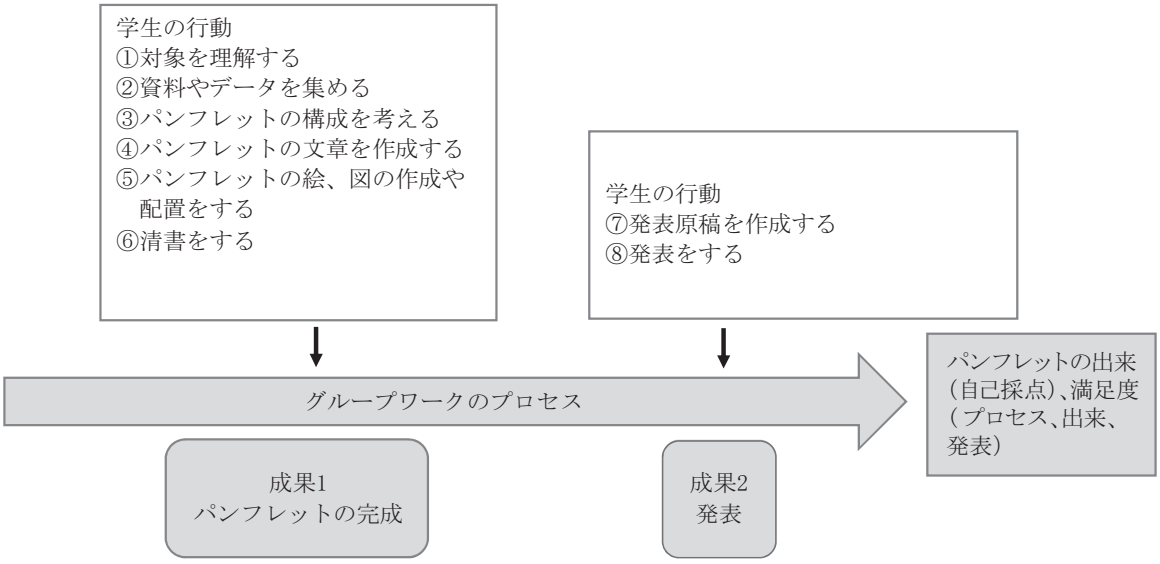

図１　概念枠組み

た。ただ、成果１は成果２を通して再認識されるため、調査時に成果１を単独で得ることは困難と考え、パンフレットの出来ばえとして自己採点をした結果とする。成果２は発表体験をメンバーの誰が担うかや、質疑応答の内容や具体的なやり取りが影響するがそれらは今回問わず、発表の体験を通しての満足度で確認する。そのため、満足度は、グループワークのプロセスにおける満足度と、パンフレットの出来についての満足度、発表の満足度の３つから確認していくこととした（図１）。

以上より、仮説として、１．パンフレットの自己採点と満足度は関連がある。２．グループワークにおける学生の行動と、成果であるパンフレットの自己採点、満足度は関連がある。の２つを立てることとする。

５．分析方法

分析にはIBM SPSS Statistics Version 20.0 for Windowsを用い、記述統計量を算出し、パンフレットテーマからみた各項目における差の検定ではKruskal-Wallis検定を用い、パンフレットテーマが結果に影響しないことを確認した上で、変数間の関係は正規性を確認してSpearmanの順位相関係数を用いて行った。有意水準は５％とした。

６．倫理的配慮

授業内でアンケート調査を実施後、当該授業の評価結果が手元に届いて以降に改めて研究の説明を行った。研究協力についての同意の有無が今後の授業やその評価等に影響しないことなど文書を用いて口頭で説明を行い、回収箱による留置法にて同意書の回収を行った。同意の意思表示があった学生の調査票は、個人を特定する学籍番号、学生氏名は削除してランダムに番号付けをしてデータ処理し、グループについても特定できないように処理した。本研究は、A大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認日2016年１月13日、承認通知番号238）。

表１　学生が関わったパンフレットテーマ　（n＝77）

テーマ	グループ	人		%
カロリーの工夫	A	5	17	22.1
	E	5		
	I	7		
外食時の工夫	B	8	21	27.3
	F	7		
	J	6		
注射指導	C	6	21	27.3
	G	8		
	K	7		
減塩の工夫	D	6	18	23.4
	H	6		
	L	6		
合　　計		77		100.0

Ⅲ．結果

１．記述統計量

テーマ毎の割り当てグループおよび人数は表１に示すとおりである。

１）パンフレットの自己採点

パンフレットの出来について100点満点中何点とするかを自己採点した結果が図２である。平均75.59±7.43 点であった。

２）グループワークにおける行動の認識

学生の行動①～⑧について、自己の行動はグループワークに貢献できたかについて「全面的にある」から「全くない」の６ 段階のどこに該当するかについての認識は図３ に示すとおりである。パンフレットの作成に関わる行動に比べて、発表は貢献が全くないとする割合が増えている。

３）パンフレットの作成、出来および発表についての満足度

パンフレット作成プロセス、パンフレットの出来、発表についてそれぞれ満足度が「全面的にある」から「全くない」の６段階のどこに該当するかについての認識は図４に示すとおりである。３項目全てが85％以上は満足であると答えており、全くないとするのはパンフレット作成プロセスの１％であった。

２．パンフレット自己採点と満足度の関連

パンフレットの自己採点結果と、パンフレット作成プロセスの満足度、パンフレットの出来の満足度、発表の満足度についてSpearman の順位相関

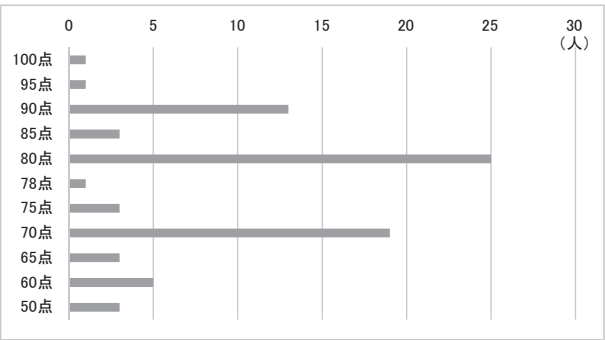

図２　パンフレットの自己採点

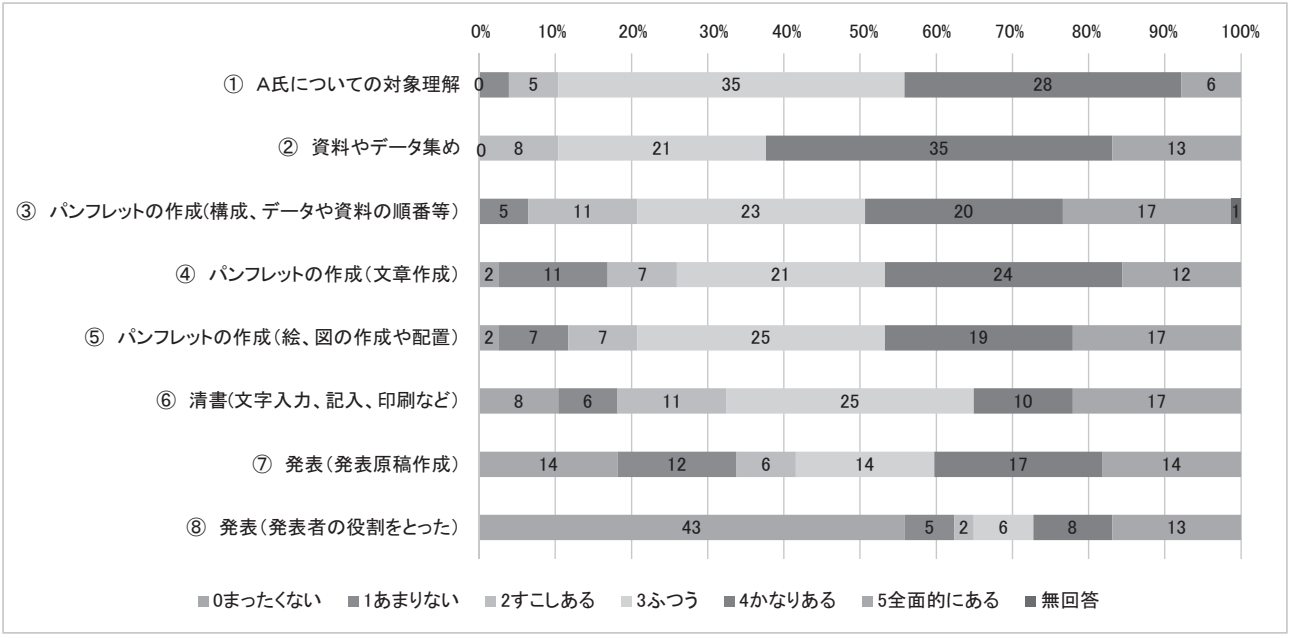

図３　学生が認識するグループワークでの自己の行動

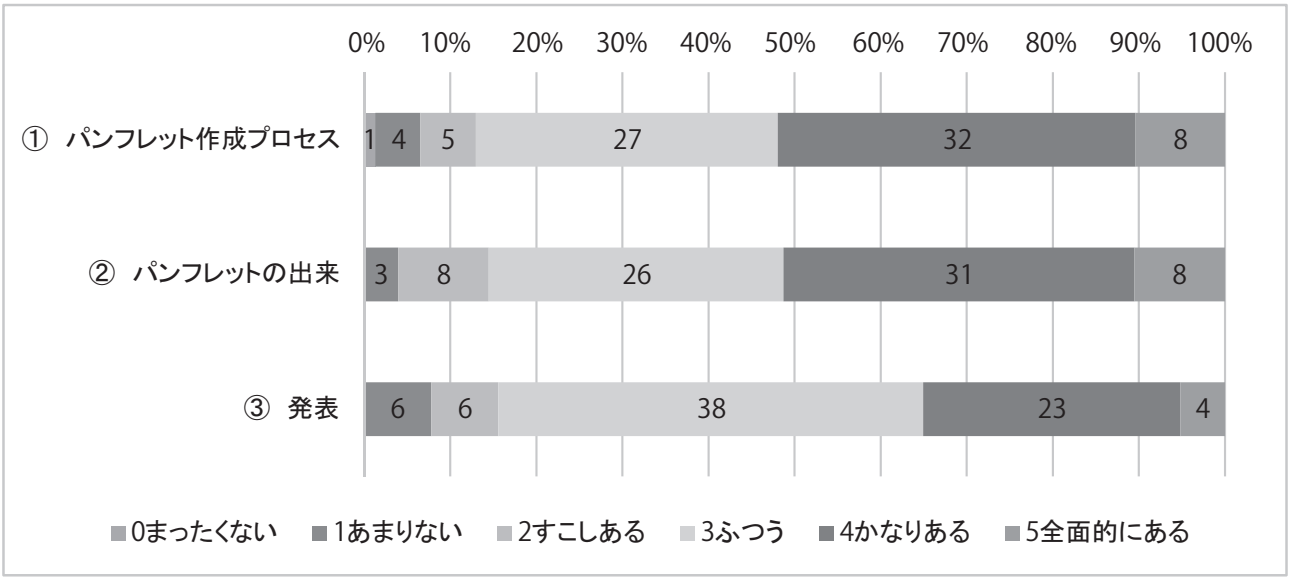

図４　パンフレットの作成、出来および発表についての満足度

係数を用いて検定を行った結果、表２に示すとおり、ｐ＜0.01で有意となり、パンフレット作成プロセスでは相関係数r＝0.420、パンフレットの出来では相関係数r=0.639、発表では相関係数r=0.563といずれの満足度もパンフレット自己採点結果とかなりの相関が認められた。

表２　パンフレット自己採点と満足度の関連（Spearmanの順位相関）

（n=77）

	満足度		
	パンフレット作成プロセス	パンフレットの出来	発表
パンフレット自己採点	0.420**	0.639**	0.563**

**p<0.01

３．パンフレットの自己採点、満足度と学生のグループワークにおける行動認識との関連

１）パンフレットの自己採点結果と学生の行動認識の関連

パンフレットの自己採点結果と学生の行動認識の関連について、Spearman の順位相関係数を用いて検定を行った結果、表３に示すとおり、ｐ＜0.01で有意となり、⑧発表者としての行動認識で相関係数r=0.257とやや相関が認められた。

表3　学生のグループワークにおける行動認識とパンフレット自己採点、満足度の関連（Spearmanの順位相関）

(n=77)

		学生のグループワークにおける行動認識							
		対象理解	資料集め	資料順番	文章作成	絵図配置	清書	発表原稿	発表者
満足度	パンフレット作成プロセス	0.323**	0.255**	0.301**	0.217	0.395**	0.219	0.259**	0.352
	パンフレットの出来	0.255**	0.217	0.151	0.148	0.255**	0.110	0.130	0.266**
	発表	0.191	0.159	0.049	0.114	0.151	0.140	0.219	0.374**
パンフレット自己採点		0.133	0.124	0.056	0.003	0.059	0.016	0.095	.257**

**$p<0.01$

２）満足度と学生の行動認識の関連

パンフレット作成プロセス、パンフレットの出来、発表それぞれの満足度と学生の行動認識の関連についても同様に検定を行った結果、表３に示すとおり、p＜0.01で有意となり、パンフレットの作成プロセスの満足度では、①対象理解で相関係数r=0.323、②資料を集める：相関係数r=0.255、③パンフレットの構成をする：相関係数r=0.301、⑤絵図を作成、配置する：相関係数r=0.395、⑦発表原稿を作成する：相関係数r=0.259、⑧発表する：相関係数r=0.257と６つの行動でやや相関が認められた。パンフレットの出来の満足度では、①対象を理解する：相関係数r=0.255、⑤絵図を作成、配置する：相関係数r=0.255、⑧発表する：r=0.266と３つの行動でやや相関が認められた。発表では、⑧発表する：相関係数r＝0.374となりやや相関が認められた。

Ⅳ．考察

１．仮説「パンフレットの自己採点と満足度は関連がある」について

今回の結果から、採点結果はパンフレット作成のプロセスや出来、発表の満足度に関連しているという仮説が証明されたといえる。

パンフレット作成のプロセス、パンフレットの出来、発表のいずれもかなりの相関がみとめられたが、最も相関が認められたのはパンフレットの出来、次に発表についての満足度であった。概念枠組みで述べたように、学生が自グループで作成したパンフレットを自己採点する際、パンフレットの完成だけでなく他のグループのパンフレットを確認する機会である発表を経て自己採点を行っていると考えると、パンフレットの出来ばえは、他のグループとの比較で判断しているといえる。

この他のグループとの比較は、発表という機会がなければ成り立たたない。また、グループワークの成果は、グループ内で判断するだけなく、他のグループとの比較や他のグループからの評価も影響するといえる。グループワークの達成感や満足を得るためにも発表という機会は有効な方法論であることがわかる。

一方、発表やパンフレットの出来ばえといった目に見える形、他者にも示せるものについての満足だけでなく、作成プロセスといった完成までの道のりにおいての満足も自己採点に関連している。

グループワークの場合、すべきことを誰が行うかによって成果が変わってくる。リーダーやメンバーといった役割だけでなく、それぞれ得意な作業を請け負ったり、ゆだねたり、話し合いながら折り合いをつけて成果物を完成させていく。このプロセスがうまくいった、自身がグループワークに貢献できた感覚が得られると、納得のいくパンフレットが作成でき、結果として満足が得られ、自己採点が高くなると考える。

２．仮説「グループワークにおける学生の行動と、成果であるパンフレットの自己採点、満足度は関連がある」について

今回の結果から、グループワークにおける学生の行動と、成果であるパンフレットの自己採点、満足度については、関連があるものとないものが明確となった。

学生の行動①～⑧は、パンフレットの作成プロセスや発表における具体的な行動を示している。これらの行動について、自己採点、満足度とすべてに関連していたのは、⑧発表をするという発表者としての体験であった。

発表の仕方は、Ａ３の資料を部分的に投影しながら説明する形式で、グループによってメンバー全員で分担して発表する、数名で発表する、個人で行うなどざまざまである。パンフレットという成果を自身が発表したか否かが満足度だけでなくパンフレットの自己採点にも影響している。これは、発表は、グループを代表する立ち位置であり、パンフレットの内容を伝える責任はグループワーク

の成果そのものにも影響するといえる。

パンフレットの作成プロセスにおける満足度と学生の行動との関連では①対象を理解する、②必要な資料を集める、③パンフレットの構成を考える、⑤絵図を作成、配置する、⑦発表原稿を作成する、⑧発表をするという行動が満足度にやや関連しているという結果であった。これは、学生がそれぞれの行動についてグループに貢献できたと思えた場合、作成プロセスの満足度も高くなるといえる。

パンフレットの出来の満足度では、①対象を理解する、⑤絵図の作成、配置をする、⑧発表をするという３つの行動においてやや相関が認められ、作成プロセスに比べて関連の認められる行動が半減している。発表における満足度では、⑧発表をするにやや関連が認められ、他の行動との関連は乏しい。

この結果は、学生が発表で何に注目しているかを示しているものであると考える。つまり、Ａ３の資料１枚に収められた絵や図が配置されたパンフレットがテーマに照らして対象に合ったものとして効果的か、意味あるものかを発表できたかどうかが満足度に影響しているといえる。

本研究の対象学生は２年生で、限られた知識を駆使して、対象理解を進め、資料を集めてパンフレットを作成している。また、自グループであったとしても学習自体は分担作業を進めていくことも多く、その出来ばえについては、どうしても見た目の印象が強くなるのは否めない。山本ら(2011)は、実習前のパンフレット作成演習の学生の振り返りから、作成上の留意点、個別性に応じるための留意点、視覚的な効果をねらう、難しさの実感というカテゴリーを得、視覚的効果では、「絵や写真を入れる」「文字を大きくする」「患者の好みの色」を意識しているとし、本研究と同様に、絵や図の選択、配置は視覚的効果をもたらすものであるとしている。視覚的効果は印象としてインパクトが大きく、伝わりやすいものを作成すると発表者として説明する上でも効果的で、満足感につながるといえる。

３．パンフレット作成を学内で教育する意味

パンフレット・リーフレットといった説明資料を作成して患者教育をすることについて、ドナＲ．ファルヴォ（1996）は、医療者が提供する情報を補うものとして用いるべきであるとし、井畑ら（2013）は、患者が理解しやすいパンフレットにしたことで手技獲得の効果がえられ、看護師の指導の質向上にもつながるとし、瀬戸ら（2007）は、チーム員が統一した媒体を用い患者指導を行うことが質の高い医療の提供につながるとしている。

このように患者にとっても医療者にとっても意味あるパンフレットであるが、学生については、畑野ら（2005）は、実習中に作成したパンフレットでの食事指導による学生の学びとして、患者の生活は意見や価値観などから個別性を生かした指導の必要性を見出しそのためのパンフレットの内容やサイズの工夫などを行っているとしている一方で、森山ら（2004）は、学生が実習において患者指導を実施してもそれを「退院後の継続看護への援助」と捉えた学生は約３割であるとしている。金子ら（2008）は、成人看護学実習での患者指導の何を学習しているかを調査し、「指導時の環境を整える」「患者が療養継続できるよう励まし回復をともに喜ぶ」「患者個人にあった指導をする」が多く「家族と患者への療養の手助けを話し合う」「患者の病気や治療の理解と受け入れを確認する」の学習は少ない傾向であるとしている。臨地実習での患者指導に関する学習内容は多岐に渡り、学生が実際に患者指導を行う場合も、その目的に応じて患者にあった内容と方法の選択が求められる。

本研究に関わる授業では、パンフレット作成にあたって紙上事例の疾患やパンフレットのテーマ（指導内容）は事前に提示している。学生は、パンフレット作成としては発達段階にあわせての内容選択や表示の工夫を体験しているが、テーマ毎の満足感においてグループ差はなかった。

今回、本研究においてパンフレット作成として挙げた行動は、研究者のパンフレット作成行動を分析したもので検証されたものではないが、学生は、ほぼこの行動に基づいてパンフレット作成に臨んでいた。特に、学生の行動と満足度や自己採点に関連がある行動である①対象を理解する、②資料やデータを集める、③パンフレットの構成を考える、⑤パンフレットの絵や図を配置する、⑦発表原稿を作成する、⑧発表をするは、グループワークをする上で学生の成果に結びつき、満足度に影響をもたらす行動であったといえる。一方、④文章を作成する、⑥清書をするといった行動は、他の行動との重複や、紙面が限られているといった条件下で絵図を中心とするパンフレットになりやすい点からみて、不要であったといえる。

患者指導のパンフレット作成について、本研究で明らかとなった学生の行動は、パンフレット作成に必要な基本的な行動の一部として捉えることが可能であり、学内での教育が必要であるといえる。

４．研究の限界と今後の課題

本研究は、成人看護対象論を受講している学生で成人看護学としては学習途上にあるものを対象としている研究成果である。この学生たちは今後学内での更なる学習と、臨地実習を経ていく。その間にさまざまな方法を活用した患者指導、療養者への指導を体験し、多くの学びを得ることになる。今回の研究では、学内の授業におけるグループでのパンフレット作成ついて述べており、個人でのパンフレット作成には言及していない。また、紙上事例に基づき事前にテーマ等を提示してのパンフレット作成行動についての研究であり、臨地実習で重視される個別性を考える患者指導の研究とは異なるものである。

今後の課題は、学内での講義後にパンフレットを作成して知識の再確認ができたとする井上ら(2014) のように､学内でのパンフレット作成であってもいつ、どのようなパンフレット作成を促すかによって、学習の深まりは異なるため、３年次の成人看護学や臨地実習における学生の様子を確認していくことである。

Ⅴ．結論

１．グループワークにおける学生の行動とパンフレットの自己採点およびパンフレット作成プロセス、パンフレットの出来、発表の満足度はやや関連があり、パンフレット作成および発表の行動として①対象を理解する、②資料やデータ集める、③パンフレットの構成を整える、④パンフレットとして絵、図の作成や配置をする、⑤発表原稿を作成する、⑥発表の体験をする、が学生にとって成果が得られ満足に結びつく行動であった。

２．パンフレットの自己採点とパンフレット作成プロセス、パンフレットの出来、発表の満足度はかなり関連があり、この体験をもたらすものとしてグループワークでパンフレットを作成するだけでなく発表という機会を設ける必要性が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました学生の皆様に感謝申し上げます。

文献

１）芥川清香，西川まり子．(2011)．看護基礎教育における患者教育の変遷　1951～1966年までの看護学教科書の文献研究．医学と生物学，155(8)，477-482

２）有福雅光，山本緑，島根和也，清水里夏子，奥原麻美，坂本栄美子．(2016)．肺がん化学療法中の患者に対する再教育の効果　化学療法の副作用と対策に対するパンフレットを使用して．中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌，11，175-178

３）ドナＲ．ファルヴォ．(1996)．上手な患者教育の方法．医学書院.

４）畑野 富美．鈴木 幸子．(2005)．成人看護実習において糖尿病患者の食事指導を実施した学生の学び．日本看護学会論文集: 看護教育，(35)，9-11

５）平賀元美．長嶺めぐみ．伊藤てる子．赤石三佐代．(2013)．成人看護学領域の学内演習と臨地実習における看護技術経験－看護技術チェックリストを用いて－．群馬医療福祉大学紀要，(2)，1-10

６）井畑さやか, 米山さやか, 三村千代美, 茅野郁子, 中西美佐穂．(2013)．APDの自己管理に向けての指導方法の検討～写真付きパンフレットを用いて～．信州大学医学部附属病院看護研究集録，41(1)，160-164

７）井上理絵．富岡美佳．梅崎みどり．(2014)．母性看護学演習における妊産褥婦への保健指導課題学習の学習効果．山陽論叢，21，1-10

８）石生大輔，濱里昌美，宮良愛子，神谷優太．(2015)．アルコール性疾患患者に対する患者指導　節酒パンフレット指導の効果．沖縄県看護研究学会集録，30，65-68

９）逸見英枝．(2006)．成人看護学におけるヘルスプロモーション教育での学生の学び－健康教育パンフレット作成を取り入れて－．新見公立短期大学紀要，27，21-32

10）勝又浜子．(2008)．保健指導・患者教育が成果を生むための戦略．日本看護科学学会誌

28(1)，81
11）梶原真由美,飯野矢住代.（2013）．婦人科がん術後患者のリンパ浮腫予防　セルフケア促進に向けたパンフレット（試案）作成と患者指導のあり方．日本がん看護学会誌，27（1），67-72
12）金子史代，清水理恵.（2008）．成人看護学実習（急性期・周手術期）における学生の患者指導の実態調査．日本看護学会論文集：看護教育，38，392-394
13）小濱優子．武内和子．山崎千寿子．一柳陽子．平井孝次郎.（2011）．成人看護学におけるrole-play法による患者指導演習の学習効果に関する研究－演習展開方法別に学生の学びを比較して－．川崎市立看護短期大学紀要，16（1），33-44
14）松島正起, 本夛やよい, 内山菜穂子, 木下美智子.（2004）．心筋梗塞患者へのパンフレット指導の現状　看護師の認識と指導方法．日本看護学会論文集：成人看護Ⅱ，34，305-307
15）文部科学省（2011）．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告書.
16）森岡広美，中本明世，山中政子，平賀元美，藤原尚子，三浦恭代.（2016）．成人看護学実習においてシミュレーション教育を体験した学生の学び．日本看護研究学会第42回学術集会抄録集，39(3)，203
17）森山恵美，關優美子，生野繁子，柴田恵子.（2004）．患者指導における「退院後の継続看護の必要性」に関する学び　２年課程看護学生の成人・老年看護実習の分析を通して．日本看護学会論文集：看護総合，35，243-245
村川 由加理.（2012）．患者教育の演習の試みとその評価．大阪市立大学看護学雑誌，　8, 33-39
18）瀬戸乃扶子．井田奈緒子．国枝美代子．坂尾雅子.（2007）．チームで取り組む患者指導～大腸がん術後パンフレットの作成・使用を通して～．金沢大学医学部附属病院看護研究発表論文集録，39，109-111
19）上羽知里，荻野亜希子，七里朋子，後藤多嘉緒，井口はるひ，遠藤綾乃，二藤隆春，山岨達也.（2015）．とろみに関する医療従事者の認識と指導用パンフレット導入による意識変化．嚥下医学，4(2)，192-203
20）山本 多香子．田村 葉子．中島 優子．　黒木 美智子．山田 豊子.（2011）．退院指導パンフレット作成による学び　学内演習後レポートと臨地実習終了後アンケートの検討．日本看護学会論文集: 看護教育，（41），264-267